魔法少女スプラッシュ
立ち読み版
小説／羽沢向一
NOVEL
挿絵／みやま零
ILLUSTRATION

登場人物紹介
Characters

スプラッシュリセ as 真田理瀬（さなだりせ）

栗実女学園二年四組クラス委員長。凛とした容姿とまっすぐな性格で後輩の女生徒たちからも人気が高い。闇の魔法少女グループ、マジカルクインテットから学園を守るため、魔法少女スプラッシュリセに変身。武器の巨大チェーンソーはすべてを斬り裂く。

ミーマ as 星美真（ほしみま）

魔法界エル・テルレークから流出した不良バトンを追って学園に転入してきた妖精。強大な魔力を持つ反面、使用者の精神を歪めてしまうという危険な不良バトンを回収するため、理瀬へ魔法少女になることを依頼。

マジカルアンジェ

強力なボウガンを操る蒼色の魔法少女。
二枚のツバサをひろげ大空を翔ける。

マジカルベルネ

小悪魔でロリロリな魔法幼女。
右手にクマのハンドパペット
「ルドルフ」をはめている。

マジカルローゼ

妖艶で肉感的な魔法美女。薔薇
をあしらったじょうろで魔法植
物を栽培する。

マジカルドリー

アメリカンなバニーガール風魔法少女。
自在に動く巨大球でリセに闘いを挑む。

マジカルディーバ

漆黒のドレスを身に纏(まと)う闇の魔法少女。
魔法のマイクを持つ。

※イラストはキャラクターデザイン段階のもので、決定稿とは若干異なります

第一章　魔法少女の学園　007
第二章　校庭の魔法大戦　056
第三章　魔法少女総進撃　112
第四章　魔法のいけにえ—magical chainsaw massacre—　161

『第二章　公園の魔法大作戦』より

※

リセが気絶していたのは、ほんの数分だったらしい。気がつくと、リセはまっすぐに立たされていた。しかし足が地面につく感触がない。そのかわりに身体の後ろ側全体が、柔らかい壁に密着していた。

「なに？　どうなっているの？　ああっ！」

校舎の窓ガラスに映る自分の姿が目に入り、愕然とした。巨大ぬいぐるみルドルフの胴体前面に、大の字の姿勢で磔（はりつけ）にされているのだ。テディベアの胴体の毛が伸びて、リセの手首と足首に巻きついている。標本にされた昆虫同然の状態だ。よく見ると、リセが切断したルドルフの右腕も元通りになっていた。

アンジェも悲惨な姿をさらしていた。

両脚をロープで縛られて、校庭に立つ時計塔の先から逆さ吊りにされている。短いスカートが完全にまくれて、太腿も白いパンティも全開になっていた。

あらわな股間には、敏感な肉の溝に沿って黒いボールがいくつも群がり、球体の半分近くが埋まって、淫らに蠢いている。

アンジェはまだ意識はあったが、下半身だけでなく胸や腹にもたかったボールに嬲られて、顔を引きつらせ、熱い喘ぎを吐きつづけている。逆さ吊りの身体を何度もびくつかせて、まともに動ける状態ではない。魔法のボウガンは、頭の下の地面に転がっていた。

もうひとりの仲間のはずのミーマの姿は、目の届くかぎり、どこにもない。たとえ近く

にいても、妖精はバトンの所有者には無力だろう。
「お目覚めね、リセちゃん」
文字通り頭の上から、悪意たっぷりのかわいい声が聞こえた。ルドルフの左肩に乗ったベルネが、ギラギラした瞳でリセを見下ろしてくる。
「これからリセちゃんの恥ずかしい姿を、栗実女学園の全員に見てもらっちゃうからね」
ルドルフの足もとにいるドリーが、破壊球に右肘をつき、豪快にして陰険に笑った。
「ハーッハハハ！　リセモエクスタシーヲ味ワエ！」
ドリーが拳を握って、破壊球の表面をぶっ叩いた。アンジェを襲った黒いボールが、大量に吐き出される。今度は、ボールは一気には襲ってこなかった。一個だけが、動けないリセの右胸に触れた。魔法少女の衣装に包まれた乳首の下側に、漆黒の球体が密着する。
「ふあっ」
右胸に異様な感触が広がる。リセは首をのけぞらせ、頭を巨大テディベアの胴体にめりこませた。
「なに、あ、ああ」
ボールが小刻みに震えていた。さざ波のような振動が、柔らかい皮膚に伝わり、乳肉全体に波及していく。はじめての不思議な感覚が、すぐに昨日の放課後に担任教師から教えられたばかりの感覚に変化した。
「きっ」

無意識に口に出しかけた言葉を、リセはあわてて唇を噛んで呑みこんだ。敵の前で、恥ずかしい言葉を洩らせない。しかし胸の中では、その言葉が反響した。

（気持ちいい。どうしてなの。どうして、こんなボールが気持ちいいの⁉）

言葉は抑えられても、熱せられた息がせり上がってくるのは止めようがない。右胸を揺さぶるボールに押し出されて、熱い喘ぎが口から次々とあふれた。

「うっんっ、はんんっ」

「ハーハハッ！　モウ感ジテイルナ」

ドリーの派手な嘲りの言葉を、リセは何度も顔を左右に動かして否定した。

「違う。感じてなんかいない！」

その顔もはっきりと紅潮し、汗が浮かんでいるのは隠しようもない。

たった一個の小さなボールに右胸を触られているだけで、乳肉の内側で細胞が溶けるような心地よさが生まれている。胸の中が煮立った粘液でいっぱいになり、皮膚の表面に染み出る錯覚に陥ってしまう。

あるはずのない粘液が、乳房と衣装との間に充満して、肌がピリピリと疼いた。胸の表面を無数の小さな虫が這いまわっているようだ。考えただけでも気持ち悪いことなのに、その疼きが心地よくてしかたない。胸に感じるすべての刺激が、リセの望まない悦楽を引き起こしている。

「バストガ疼イテ、タマラナイカ。ドリー様ノボールノ振動ハ、性感ヲアクティヴニスル。

オマエハ淫乱ボディニナルノダ。タップリトヨガルガイイ！」
「い、淫乱なんて、なるわけがない、かふうっ！」
左胸にも黒いボールが貼りついた。右胸と同じく、乳首の下の位置だ。
「はうう、左胸が、ああっ……」
乳房だけでなく、心臓そのものを責められている気がした。ボールのバイブレーションに、鼓動が同調させられる。心臓が脈打つたびに、胸に快感の電流が走り、リセはたまらず胴体をよじってしまう。
胸を震わせる快感波動の同心円が二つになり、重なり合い、衝撃を増幅する。乳房の肌を苛む疼きはいっそうつらくなる。
「んうっ、くっんんん……」
食いしばった歯の間から、意図しないうめきが艶めかしくこぼれる。振動に突き上げられて、コスチュームの胸の表面に、二つの突起がぽつりと浮き上がりはじめた。ベルネが目ざとく見つけて、満面の笑みでわざとらしく指摘する。
「リセちゃんの乳首が触ってもいないのに勃ってきたわ。すっごくいやらしいわね」
「うるさい、うるさい」
「せっかくだから、リセちゃんの恥ずかしい胸を、学園のみんなに見てもらうわね」
「みんなにって、なにを、くううっん！」
新たな複数のボールが、リセのCカップの胸に襲いかかってきた。両方の乳首の上側と

左右に球面が押しつけられ、官能振動を打ちこんでくる。複数の波が重なり、胸を包む布がガラスのようにひび割れ、はじけ飛んだ。魔法少女のコスチュームの下には、ブラジャーなど着けていない。リセの裸の胸が露出させられた。

白いふくらみはボールに責められて、全体にわずかに色づき、乳輪も乳首も本来の淡い桜色がより濃くなっている。

「いやあっ！」

リセの羞恥の悲鳴が、校庭を渡り、校舎へと届いた。

各階の窓に鈴なりになった女生徒たちが、自分のことのように羞恥に顔を引きつらせる。

大勢の視線にさらされた乳房に、八個の黒いボールが直接密着した。Cカップの柔肉の丘を穿つように、四方から容赦なくえぐられる。ボールの群れから叩きこまれる乳悦は何倍にも増えて、リセは衝撃に打ちのめされた。

われを忘れて、同じ言葉を何度も叫んでしまう。

「ひいっ、やっ、いやあ、やめて！」

乳房だけでなく上半身全体が、快感という業火でグツグツと煮立てられた。生徒たちに見られているのがわかっていても、身体が反応するのを止められない。拘束された手足を支えにして全身をうねらせ、背中や尻を巨大テディベアの腹にこすりつけてしまう。自分の背中で、ぬいぐるみの胴体に穴を掘ろうとしているようだ。

八個のボールの中心では、赤味を増した乳首が限界まで屹立していた。ずっと無視され

て、直接刺激を与えられないことを抗議するように、ふるふると震えている。針でつつけば、破裂して、血か母乳を噴き出しそうだ。

悶える乳首を、ベルネの視線が貫いた。

「ほらほら、栗実のみんなが見つめている前で、リセちゃんの乳首が大変なことになっちゃっているわ。つまんでみたら、どうなるのかしら？」

快楽によじれるリセの背筋に、冷たい恐怖が走った。幼女の姿に化けた女教師の視線を意識するだけで、乳首がヒリヒリする。

（実際に触られたら、気持ちよすぎて、おかしくなる。みんなの前で恥をかいちゃう）

「乳首（ニプル）ニタッチサレタクナイミタイダナ。コレナラドウダ」

ドリーの指が鳴った。リセの胸から八個のボールが離れて、空中でダンスをはじめた。隠すものがなくなり、胸のすべてが生徒と教師たちに公開された。遠目にもリセの胸が著しく張りつめて、紅潮しているのがわかる。しこりきった乳首が反りかえり、上へ向いているのが知られた。

胸から離れたボールが、列を作ってリセの顔の前を飛びまわった。

「あ、あああ……」

リセの瞳には、ボールの群舞など映らなかった。意識は解放されたはずの胸に集中している。ボールが離れた瞬間から、直接の快感は消えたが、猛烈な肉の疼きが取り残されていた。胸全体に広がった波紋が二つの乳首に集まり、勃起した肉筒に疼きが凝縮する。

「うっ、うあああ……」
リセは頭と両肩を背後のテディベアに押しつけて、胸を前に突き出した。自分が恥ずかしいことをしているとわかっていても、身体が言うことを聞かない。張りつめた乳房を左右に揺り動かしつづけた。
しかし自分が動いてみても、乳首の先端にはなにも触れない。疼きを癒す刺激は得られない。ボールの淫らな魔法で強烈に昂らされた乳首を満足させてくれるものは、同じボールしかないと、リセは直感した。
(でも、あああ、でも、そんなことは言えない。ドリーとベルネに屈服したことになる。みんなの前で、敗北を認めたことになる)
「わかっているわよ。リセちゃんの希望は」
「ドリー様ノワンダホーナマジックボールヲ、乳首(ニプル)ニ欲シイノダナ」
「素直にお願いするクマー」
二人と一頭がかりの誘惑の言葉を、リセは崩落しかけた意地をかき集めて否定する。
「いや。絶対にいや！　思い通りにはならない！」
ベルネとドリーは顔を見合わせた。すぐにたちの悪い表情でうなずき合う。
「なかなかがんばるわね、根性のある子は大好きよ」
「モア、モア、ガンバレ！　ハーッハハハハ！」
空中のボールのうちの二個が、乳首に向かって移動した。リセによく見えるように、ゆ

焦燥を煽りつづけた。
「いいかげんに、あきらめてはどうかしら。アンジェみたいに負けを認めて、身をまかせればいいのよ」
リセの頭が、テディベアの両手に挟まれた。豪力で首をねじり上げられ、顔を時計塔へと向けられる。目に映るのは逆さ吊りのアンジェの姿態だ。
「アンジェが悦んでいるのを見れば、リセちゃんもしてほしくなるわよ、ねえ、ドリー」
「レッツ歌エ！」
ドリーが指を鳴らすと、アンジェの身体にとりついたボールが重低音のうなりを発した。ボールの不気味な合奏とともに、それまでほとんど動きのなかったアンジェの喉から、凄まじい悲鳴がほとばしった。
「ひいいいいっ！」
逆さ吊りの不自由すぎる体勢でありながら、海老が跳ねるように暴れて、前後左右へ身体が揺れる。背中や尻がスチールの支柱にぶつかり、ボールが金属音を鳴らした。
アンジェの朦朧としていた意識が、一気に覚醒させられた。股間から快感のドリルを突き立てられ、身体の中心を貫かれて、脳をえぐられた。
「ああっ、いやああっ！　やめて、ドリー！　リセさんの前ではやめて！」
ベルネが愛らしくも殺伐たる笑い声をふりまいた。
「きゃはははは。聞いた、リセちゃん。気持ちよさそうでしょう。アンジェは、いいえ、

っくりと勃起乳首の先端へと接近してくる。ボールの振動が空気を震わせるのが、敏感になった乳首の表面に伝わってきた。

リセは息を呑んだ。ボールが触れようとしている。戦慄と同時に、身体の強い要求を感じた。一秒でも早く刺激が欲しいと、乳首がさらに疼きを激しくする。理性と肉体の背反する欲求に引き裂かれて、ただボールの動きを凝視するしかない。

触れた！

そう確信した瞬間、二個のボールが同時に左右にそれた。身体にはかすかにも触れない。覚悟していただけに、緊張がゆるむと同時に、快感への渇望が大波となって押しよせてくる。

（た、たまらない。胸をいじられなくても、おかしくなりそう。ああ、また）

別のボールが二個一組になって、再びゆっくりと近づいてくる。リセは、来て、と叫びそうになるのを必死に抑えつけた。今回も焦らすだけ焦らされて、ボールが乳首とすれ違って離れていった。

「くうっ」

リセは奥歯を噛みしめた。肉体が悲鳴をほとばしらせている。神経が限界を迎えて、全身が痙攣のように震えた。

悪辣な拷問は休まずくりかえされた。見ないように目を閉じても、空気の流れでボールの接近を体感してしまう。次々と魔法のボールが乳首にギリギリまで近づいては、リセの

開明望はなにも知らない顔をしてるけど、処女じゃないのよ！」

（まさか！）

たとえ二年四組の全員に男性経験があったとしても、望だけはバージンだと思っていた。リセだけでなく、クラス全員がそう納得するに違いない。

「驚いてるのね、リセちゃん。でも、あたしたちクインテットはリーダーからバトンをもらうときに、身体を捧げているのよ。それじゃあ、非処女の証拠を見せてあげるわよ」

「ハーハハッハ！　アタック！」

アンジェの股間に埋まったボールのうなりが大きくなり、女体でもっとも敏感な部分を守るパンティの白い布が引き裂かれた。下腹部を包む布を残しながら、恥丘と肉の裂け目があらわになる。

美少女の露出した秘唇の間に、黒い金属のボールが並んで挟まった姿は、アンジェ本人の意志に反して、淫猥としか言いようがない。

ボールのひとつは、アンジェの女性器の先端にある小さな緋色の突起を押しつぶしていた。金属が発する魔法の振動が、クリトリスの包皮を剥き上げて、快感神経が集中した肉の粒を休みなく震わせている。

「はああっ、いや、ああっ、止めて、そこを押さないで、うっんんん……」

女芯に送られてくる強烈な悦楽を否定しようと、アンジェは首を振りたくった。だが淫らな刺激を甘受する悦びを知った肉芽は、貪欲に快感を喰らっている。

クリトリス以外にも、ボールの魔力によって左右の肉襞がぷるぷると震わされ、尿道口や肛門まで熱い刺激を受けつづけている。振動する球面が触れるすべての秘粘膜が、快感発生器官と化して、悦楽の淵へとアンジェを引きずりこんでいく。

「はううっ、うっんん、いやぁあ……」

全然違う、とアンジェは思った。昨日の真田さんと触れ合ったときも、全身が昂り、恥ずかしくも天に昇るような思いに包まれた。肉の快楽そのものは今のほうがはるかに大きいが、心は暗い闇へ堕ちていくばかりだ。

膣口の表面にあるボールが、狭い肉孔の中へと潜りこんだ。

「ひいっ、ひいいあっ！　は、入ってきちゃう！」

膣の狭い粘膜が押し開かれて、鉄球が女の器官内部へと侵入してくる。逆さにぶら下がったアンジェの肢体が、大きく揺れた。アンジェが快感の大波にさらわれているのは、リセだけでなく、女生徒たちにもあきらかだった。

「いや、また入ってくる、ふあああっ」

最初のボールの後を追って、二個、三個と球体が肉孔へ潜りこんだ。ボールが女性器の奥へと消えるたびに、アンジェの口から悲痛な歓喜の悲鳴が飛び出し、膣口と尿道から透明な体液があふれる。アンジェの腹と背中が、流れ落ちる自身の分泌液で濡れそぼった。

五個目のボールが腹の中に入ってきたときに、アンジェは限界に達した。身体の中で官能の渦が、大きな竜巻になる。マジカルクインテットで教えこまれた絶頂の言葉が、条件

反射のように口をついてしまう。
「あああああ、イクっ、イッちゃう‼　イッうんぐぐ」
性感の極まりを誰にともなく訴えるアンジェの口を、新たな黒いボールがふさいだ。
「ふごっ、ふぐううっ！」
絶頂を訴える唇をこじ開けて、ボールが口内へ入りこみ、すぐに外から見えなくなった。喉に丸い盛り上がりが生まれ、逆さになった首を上へ移動していく。
「んぐっ、あぐううっ、こおおおっ！」
唖然とするリセと女生徒たちが見つめる前で、膣と同じように、口から喉へと次々とボールが侵入した。たまらずリセはベルネとドリーへ懇願した。
「やめて！　アンジェが死んじゃう！」
ベルネがうきうきとした顔を、左右に振った。
「誤解しないでね。ベルネたちはアンジェを痛めつけて、リセちゃんを脅迫するつもりはないの」
「ドリー様ノマジックボールニカカレバ、喉ノ奥モ性感帯ニ早変ワリダ。喉デエクスタシーヲ感ジルゼ！」
リセは言葉をつまらせた。アンジェがひときわ激しく全身をのけぞらせ、かすれて獣じみた咆哮を発した。
「イグッ！　イグイグ、イイグフウウウウッ‼」

膣と口から同時に、ぐしょ濡れのボールが連続して飛び出した。魔法の淫具を追って、膣から大量の女蜜がどっと噴出し、アンジェの胴体と顔をどろどろに濡らす。口の端からは、愛液のように涎が滴り落ちた。

「イク、イクイクイク……」

かぼそい声で凄絶な絶頂の余韻を伝えながら、アンジェはぐったりとして動かなくなってしまう。

「どうかしら。アンジェのイキっぷりを見たら、リセちゃんもイキたくなったでしょう」

ベルネの誘惑の言葉は、またはねつけられた。リセは口を閉ざしたたまま、頑強に首を横に動かした。発狂しそうな疼きの嵐に耐えつづける決意だ。

「あーあ、飽きてきちゃったわね。もうやっちゃってよ、ドリー」

「OK！　リセノボディモ、ハートモ、ドロドロノグズグズニシテヤルゼ！」

「クーマクマクマクマー！」

順番を待っていた一組のボールが、左右の乳房に突進する。振動する球面が乳首にぶつかり、柔肉の中にめりこんだ。

「あおおおおうっ！」

リセの喉から絶叫が搾り出される。胸で凄絶な爆発が起こり、意識を別の世界へと吹き飛ばした。眼前に強烈な白い閃光が広がり、視野を白く塗りつぶされた。いや、脳そのものが白く染められている。全身がテディベアの体内に埋まるほど、激しく身悶えつづけた。

『第四章　魔法のいけにえ―magical chainsaw massacre―』より

「リセ、もっといい気持ちにさせてあげるわ」
ローゼの右手がリセの頭上へ伸びて、浮いている石榴の実をつかんだ。それまでなにをしても定位置からずれなかった石榴が、簡単にもぎとられてしまう。
石榴に、左手に持った黄金のじょうろの水をかけて、リセの尻の谷間に押しつけた。
「なにをするの、ひあっ！」
丸い石榴の実が、細長く形を変えて、肛門に潜りこんでくる。芋虫のようにうねうねと蠢き、尻のすぼまりをこじ開けて、内部の粘膜をつついてくる。
「あっ、むはあっ、うんんん……」
魔法植物に寄生されたリセの身体は、恐ろしいほど快感に貪欲にされている。尻の穴も例外ではない。本来性器ではない排泄孔を内側から嬲られても、痛みはまったく感じない。逆に尻肉が蕩けるほどの熱い悦楽があふれて、下半身が勝手にくねってしまう。
「うくうっ、あん、やめて！　入ってこないで！」
後ろへ首をひねっても、自分の肛門は見えない。次々とあふれるマグマのような快感だけが、魔法の石榴が尻の奥に侵入していることを証明している。両手は尻の上で縛られているので、まだ肛門の外に出ている石榴の後ろ半分を捕まえることもできない。
リセのみじめでセクシーな尻振りダンスをながめて、ローゼがせせら笑った。
「ほらほら、リセが実らせた石榴が、自分の体内にもどっていくわよ。お尻が気持ちよくて、たまらないでしょう？」

石榴の蠢動に合わせて、リセは後ろ手縛りの不自由な身体を踊らせる。後ろの快楽が、音叉のように、前からそそり立つペニスに共鳴して、射精を求める疼きがさらに激しくなった。リセはわずかでもペニスの欲求を発散させるように、亀頭を前後左右に振りたてる。

「ああっ、取って。石榴をお尻から出して、ひっ！」

首を振る勃起から、重い快感の衝撃が伝わってくる。亀頭を、ディーバの右手でつかまれたのだ。

「具合を確かめてみましょう」

ディーバの指と掌が、亀頭を優しく包み、水晶玉を磨くようになめらかに動いた。

「あっ、んんん」

ソフトボール部のピッチャーである雪代の手とは異なる、生徒会長の繊細で華奢な指と掌が、敏感な亀頭粘膜に密着する。何人もの人間と、妖精の命を奪った魔法少女の残忍な指は、リセを慈しむように優しい愛撫を与えた。

「はあっ、あああ、やめて、会長、ふああ」

（どうして、こんなこと……こんなにひどい人の手なのに、たまらなくやさしくて、気持ちいい！）

旧体育館でローゼに襲われてから、テディベアに処女を強奪されたときも、量産魔法少女集団に嬲られたときも、ミーマを貫かされたときも、すべて凶悪な快感の嵐にさらされた。ディーバの両手から受ける愛撫はまったく違う。はじめて味わう、柔らかく、ゆった

りした悦びだ。本当の恋人同士の愛の営みとは、こういうものなのかもしれないと、経験のないリセに思わせる。

自分が置かれた状況も忘れて、リセはディーバの手に身をゆだねてしまう。

「あはああ、倉崎会長……たまらない……」

口から出てくる声も、今までの悲鳴とは違った。無意識にペニスを愛してくれる女性に甘える響きになっていた。

「うふふふ。リセさん、わたしの手は気に入ってくれたかしら」

「ああ、会長……うっんん、そこは、ああ……」

もともと生徒会長は、リセの憧れの女性だった。知らず知らずに抵抗の意志が溶かされ、以前から抱いていた恋愛にも似た想いが表面に出てくる。ディーバの深い黒瞳が、リセのすべてを見通しているようにきらめく。

「リセさんは、本当はわたしを好きなんでしょう」

「そ、それは……」

恥ずかしくも心地よい愉悦に、リセは身悶えした。

「だから、こうされてもうれしいわよね」

いきなりディーバが人差し指を、亀頭の先端に突き立てた。桜貝色の可憐な爪が、鈴口を強引に押し広げて、膣にペニスを挿入するように侵入する。

「あぎぎいいいいっ！」

リセが全身をこわばらせて絶叫した。指先をこじ入れられ、亀頭を内側から広げられたペニスが、今にもはじけそうに震えている。
「か、会長、あがああ！」
「あら、すてきな声を出すのね。いいわ、リセさん」
恐怖に見開かれたリサの目に映るディーバの顔は、今までと変わらない優美な笑顔のままだ。細い指が第一関節まで亀頭の中に潜って、残酷に尿道をえぐり、こねくっている。
「あきゃあっ！　や、やめて、指を抜いてっ！　ひぐうううっ！」
「このおちんちんなら、なにをされても気持ちいいはずよ。リセさんもうれしくてたまらないでしょう」
リセには気持ちいいのか、苦しいのか、判断がつかない。ディーバの指はさらに奥に入りこんできて、肉幹の側面にはっきりと指の形が浮かんでいる。
「ほらほら、こうすると、もっと気持ちいいでしょう」
亀頭からたおやかな人差し指が引き出され、爪先だけが鈴口にひっかけられた。そこから一転して、指の根元まで押しこまれる。広いた尿道の出口から透明な体液が押し出されて、ペニスの側面を伝い落ちた。
「あおおおっ！」
鮮烈な衝撃を受けて、リセの視線が宙をさまよう。ディーバが容赦なく人差し指を上下させて、尿道を犯した。

「リセさんのおちんちんの中は、とっても気もちいいわ。尿道がにゅくにゅくして最高よ」
「ひ、ひああ……ふぐううう！」
苦痛と快楽とあらゆる感覚が、リセの中で混沌とする。そんな状態でありながら、肛門を嬲る石榴の責めも加わって、ミーマを貫いたときよりも早く、体内で射精のスイッチが入った。しかしなにかが違う。
「あひいっ！　な、なに、変なものが！」
精液よりも強烈な圧迫感が、輸精管から現れ、尿道を昇ってくる。硬いものがペニスの内側をえぐり、ジリジリと上昇してくる。入口から貫く指と呼応するように、奥から尿道を広げられた。
「あっ、あぐあっ！　な、なに、ひいいいっ！」
もし本物の男が同じ目にあったら、激痛で失神したかもしれない。魔法の男根は、この凄絶な感覚を恐ろしい快楽に変換した。一気に上昇する精液とは異なり、ゆっくりと個体が昇ってくる。射精したくてもできない焦燥感と、ペニスを内側からしごかれる猛烈な快感が襲う。
「あっ、あくう、出て！　な、なんでもいいから、早く、外へ出てえっ！」
「あら、リセさんたら、はしたないこと。そんなに射精したいなんて、早くもおちんちんの快楽に夢中になっているのね」
ディーバの揶揄の言葉も、リセの耳には入らなかった。ただひたすら解放を求めて腰を

動かし、自分からディーバの指を亀頭の奥へ誘ってしまう。
「出させて！　はっああ、うっんん、お願い、もう出ていってっ！」
鈴口に入った指のまわりから、先走りの透明な体液が、あふれ出した。しかし本来の解放感は得られない。灼けつく焦燥が、リセの中で気が狂うほどに大きくなるばかりだ。
ディーバが左手で肉幹を握り、子供のように瞳を輝かせた。
「感じるわ。リセさんのおちんちんの中を、すてきなものが出口を求めて進んでいくわ」
「な、なにが、わたしの中から出てくるの？」
「自分の目で確かめなさい。それ！」
ディーバの左手が勃起の根元をつかんだ。尿道の中にある異物を握って、残り少ない歯磨き粉のチューブを搾り出すように、上へ向けてしごいた。異物が肉棒の中を昇るスピードが上がる。
「ひあああああっ！　きついいっ！」
リセは背骨がへし折れそうなほどのけぞり、涙をふりしぼった。
「出るっ！　やっと外に出せるう！　はあああっ！」
「出てきなさい！」
小刻みに震える亀頭から、ディーバが人差し指を引き抜いた。
「ひっ！」
指の後を追って、拡張された鈴口から黒い球体が勢いよく発射され、シャンパンの栓が

抜けたみたいに大量の精液がどっと噴出する。
じらされただけに、今までよりもはるかに壮絶な射精だ。リセはなにが起きたのかわからないまま、絶叫していた。
「イクっ、イクイクイクイクううっ!!」
ディーバが白い噴水を巧みに避けて、指先で空中の黒球だけをつまみ取った。苛烈な絶頂に打ちのめされてうなだれるリセの顔の前に、ディーバの指が突きつけられる。
「ごらんなさい」
指先にあるものは、間違いなく魔法石榴の種。今は肛門の中にある実から飛び出していたものだ。
「リセさんの射精とともに、おちんちんから出るようにしてあげたのよ。これなら簡単に魔法少女を産めるでしょう。ただリセさんは女とセックスするだけでいいのだものね」
「ば、ばかな。そんな、ばかなこと」
「リセさんのご意見を参考にするつもりはないわ。まずはリセさんとアンジェさんにバトンを壊された二人を、回復させてもらうわ」
ディーバの左手のバトンが、一瞬で黒いマイクスタンドと化した。マイクを唇の前へ滑らせ、流麗なメロディをつけた言葉を唄った。
「ドリーさん。ベルネさん。早く起きなさい。強くなれるわよ」
バトンを破壊されてから、校庭で気絶したまま放置されていたマジカルドリーとマジカ

ルベルネの身体が、見えない糸で引っぱられたように不自然な姿勢で立ち上がった。
直立した二人のまぶたが開き、顔に生気がもどる。金髪爆乳バニーガール魔法少女ドリーと、エプロンドレス魔法少女ベルネが、顔を見合わせた。
「ホワッツアップ？」
「どうなっちゃってるの？」
事態を把握していない部下に、ディーバが要領よく説明した。
「アイ、シー！」
「なんとなく、わかっちゃった」
ドリーとベルネの凶悪に濡れた瞳が、じっとりとした視線をリセにからめてくる。
「リセノデ（チンチン）ックヲ犯セバ、イイノダナ」
「とっても楽しい仕事ね」
ドリーはドスドスと大地を踏みしめ、ベルネはたくさんのテディベアをあしらったドレスの裾をふわふわとひらめかせて、リセへと歩み寄ってくる。
リセは逃げることは許されない。身じろぎをして、萎えることを忘れた勃起を揺らすだけだ。
ドリーがはしたなく舌なめずりする。
「正直ニ告白シテヤル。バトンデオナニーヲ何度モシタガ、本物ノディックヲインサートスルノハ、コレガハジメテダゾ」

なにをいばっているのか、よくわからないが、ドリーが百センチは超える巨大バストをブルルンとそらした。どうやら魔法少女になるまでは、留学生は処女だったようだ。
「生身ノディックガドンナモノカ、テイスティングシテヤル」
リセは右肩を、ドリーの黒いブーツの裏で蹴られた。あっさりと背後の地面に転がされた胴体を、ドリーにまたがられる。
地面から見上げるドリーの大きな肉体は、リセが思う以上に豊かな官能の魅力にあふれていた。巨大な二つの乳房は、自重で崩落しそうにオーバーハングした崖のようだ。黒い網タイツに包まれた太腿は、ムチムチした弾力と艶めかしさを発散している。なによりコスチュームの股間の布が、充血して盛り上がった恥丘に押されて破れそうになっているのが悩ましい。
ドリーの手が、バニーガールコスチュームの下腹部を被う布をやすやすとむしり取った。バトンを失っても、まだ怪力は残っているらしい。
あらわになったドリーの秘処を、リセは下から覗くことになった。淡い金毛に飾られた恥丘が、誇らしげにリセの視界を圧している。高く盛り上がった秘密の丘陵の中心を走る深い亀裂に、ドリーが指をそえた。
「ルーック！」
自信たっぷりな口調で命じて、自分から肉唇を左右に広げてみせる。作りは、リセがはじめて見たミーマの女性器と変わらなかった。

ただし、すべてが大ぶりだ。淫欲に燃えて早くもじっとり濡れた肉襞が、別の軟体動物のごとくうねうねと蠢いて、リセの勃起を強烈に誘ってくる。なにも入らないと思えた繊細なミーマに対して、ドリーなら巨根を楽々と呑みこみそうだ。

「くううっ！」

リセの喉から苦しげな喘ぎがこぼれた。ドリーの秘部を見せつけられて、体内にペニスの咆哮が反響した。亀頭が火を噴きそうに疼き狂い、ひとりでに腰が刺激を求めて上下してしまう。尻に挿入されたままの石榴も、またのたうちはじめた。

尻を刺激され、肉棒の欲望の叫びに蝕まれて、リセの意識に熱い溶岩が注がれる。脳がぐつぐつと沸騰して、ドリーに文字通りの種付けをしなくては、発狂しそうだ。

リセを苦しめる淫らな嵐を察したのか、ドリーが両手を頭の後ろで組み、アメリカのストリッパーさながらに爆乳を振りたて、腰をくねらせて、膝をゆっくりと曲げた。

リセは息を凝らして、ドリーの秘花が下りてくるのを注視する。指を離しても華々しく開花したままの淫靡な花園が、じょじょに大きくなる光景から、目が離せない。

（ああ、もう少し。もう少しで、ドリーとつながる）

胸中の言葉が、戦慄なのか、希望なのか、自分でもわからない。

「ノオオオ！」

突然ドリーがはじめて出す妖艶な声音で告げると、腰をくねらせながら、ゆったりと立ち上がった。

「そんな」
リセはとっさにブリッジをして、挿入するべき肉孔を追った。あと数ミリで亀頭が濡れた粘膜に触れそうになるが、ぎりぎりで逃げられてしまった。
「ああ、こんなこと……」
自分のしていることに気づき、リセは顔を赤く染めて、あわててブリッジを崩した。
(恥ずかしすぎる。相手は敵なのに、餓えた痴女みたいになって……)
羞恥に引きつるリセの顔を、ドリーが嗜虐の興奮に輝く瞳で見下ろしてくる。
「ドリー様ノプッシーガ欲シカッタラ、インサートサセテクダサイト、プリーズシナ」
「うるさい。種をもらえなくて困るのは、おまえのほうじゃないか」
「ドリー様ノホウカラ、リセトツナガレト言ウノカ。ドリー様トファックシタインダナ」
「違う！　わたしは、はひいいっ！」
リセの腰の内部で、種がぐりっと動いた。種そのものが意思を持ち、一刻も早い種付けを主張しているようだ。種が連続して動くたびに、射精欲求が熱い電撃と化して全身を焼いた。
「ひいいっ、あ、あぐう！　やめて、許して！」
体内をドリルで削られるのにも似た疼撃を何度も受けて、たまらず許しを乞う言葉を口にした。もちろん体内の拷問者は聞く耳など、持ちえない。種が容赦なしに暴れつづけると、限界はあっけなく訪れた。

れた乳房から汗が飛び散り、リセの顔と身体を濡らす。
豪力を誇るドリーだけあって、膣壁の絞めつけも凄まじい。リセの尿道が押しつぶされて、中を上昇する種のスピードがさらに遅々としたものになり、射精を求める焦燥がひどくなった。同時に、硬い種で尿道粘膜を穿たれる快感が倍増してしまう。
「ひいいっ、ドリー、ゆ、ゆるめて！　おちんちん、こわれる。おかしくなるうっ！」
「ワンダフルッ！　ディック最高！　アオオウ、アイラブディック！」
全然リセの言葉は届いていない。ドリーははじめて味わう生きたペニスの喜悦で、身も心も忘我の境地に飛翔している。ドリーが自分の肉欲に忠実になり、咥えこんだ男根を猛烈に絞りあげるほど、リセは際限のない官能の拷問にかけられてしまう。
「ＨＯＷＷＷ！　カミング、カミングッ！　オオオウ、カミングーッ!!」
ドリーの長身が激しく揺れた。頭を飾る兎の耳が狂ったようにはためき、アメリカ式の絶頂の言葉を何度もくりかえした。括約筋が万力となって、ペニスをつぶしにかかる。
「き、きついい！　ふあああっ！」
悲鳴を上げて痙攣するリセの上で、ドリーが充足の吐息を長々と洩らした。
「ハオオオウ……」
ドリーが絶頂の余韻に浸るとともに、膣の絞めつけが弛緩する。ようやくリセは種の射出を許された。強引に押さえつけられた反動で、種が加速された。
「出せる！　はあおおおう！」

鈴口を引き裂く勢いで、種が飛び出した。脳が粉砕されるほどの絶頂に襲われる。
「出るうっ！　イクっイクイクイッちゃううっ!!」
後を追って、膨大な精液がドリーの体内を打った。
「オオオウ！　ザーメンガドクドク入ッテクルウ！　マタ昇ルウッ!!」
「あああああ、精液が、まだ出てるう、うああ、イクうっ!!」
射精の悦楽の波状攻撃が、リセの意識を遠い場所へ連れ去る。
だが新たな異変が、リセの意識を引きもどさせた。
絶頂の余韻に濡んだ瞳に、ドリーの巨乳の深い谷間から出現した新たなバトンが映った。一度は破壊されたバトンと同じく、先端に兎の飾りがついたデザインだが、全体に星のような輝きをちりばめた華麗なものに変わっている。
「ワーオ、アメージング！」
ドリーが自分の胸からバトンを引き抜き、踊るようにリセの腰の上から離れた。最後に亀頭をこすられて、リセの身体に歓喜の波が走る。
「うっくう……」
解放されたペニスは、やはり萎えてはいない。力強く勃起したままだ。喘ぎながらも、リセの視線はドリーが振りまわすバトンを追った。
（わたしのせいだ。せっかくアンジェが壊してくれたドリーのバトンを、わたしが出した種が復活させてしまった。はっきりと魔力を感じる。前のバトンよりも強力だ）

「あああっ！　お願い、ドリー！　わたしに挿れさせてっ！」
「マーヴェラス！　リセノビッチナ言葉ガ、プッシーヲウレシ泣キサセル。アアア、モウ、タマラナイ」
自身も欲望の頂点に達したドリーの右手が、わななくペニスをがっちりとつかんだ。本人は軽く握っているつもりだが、つぶされるほどの腕力だ。それすらも魔法の肉茎は快感に変えている。
さっきとは違い、一気に腰が落ちてきた。餓えた女そのものに、ペニス全体が難なく呑まれた。
「はひいいいい！」
「ＯＨＨＨＨＨＨ！」
ドリーが今までの余裕のポーズを忘れて、みっちりと肉がつまった尻を渦巻かせた。リセを責めることなど完全に忘れ、自分の快楽を貪る悦びに溺れている。
「オウウ、イエスッ！　イエスイエスイエースッ！」
バスケットボールのように上下左右に暴れる巨乳を両手ですくい上げ、張りつめた乳肉を揉みしだく。持ち上げた双爆乳は充分に口に届いた。高く勃起した乳首を左右まとめて自分で咥え、唇と歯でしごいた。
「フオオオオッ！　オオオウッ！」
快感に痺れる二つの乳首のまわりから、ドリーがよがり声をあふれさせる。引き伸ばさ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/